

「桜を折りたるさま」の匂宮

福 島 和 奏

はじめに

『源氏物語』第三部・宇治十帖の世界では、光源氏亡き後の物語が描かれる。都から宇治に舞台を移し、光源氏の子とされる薫と、光源氏の孫である匂宮が主人公となり、光源氏の弟八の宮の娘たちとの恋愛を通して物語が展開する。八の宮とその長女・大君の死後、八の宮の次女である中の君は、匂宮と結婚し、都に上っていた。薫は、好意を抱いていた大君が亡くなったことでその人形を求めて妹の中の君に迫る。困り果てた中の君は、異母妹で大君に瓜二つの浮舟の存在を薫に伝え、浮舟の物語が進んでいくことになる。

浮舟の母親は、常陸介の妻である。常陸介と結婚する前は八の宮に仕えており、八の宮の北の方の姪にあたる。北の方が亡くなった際、八の宮と関係を持ち、浮舟が誕生していた。しかし八の宮はその後、俗聖と呼ばれる生活をしていくため、中将の君と浮舟は八の

宮邸を出て行く事になり、常陸介の妻となったのだ。常陸介と中将の君との間にも子どもが生まれており、浮舟は常陸介からは忌み嫌われていた。中将の君は義父に大事にされない浮舟を気に掛けており、左近少将との婚姻を決定する。しかし左近少将は常陸介の財産を求めて婚姻を決めたのであり、浮舟ではなく、常陸介の妻子との婚姻に鞍替えしてしまったのだった。

左近少将との婚姻が破談になってしまった浮舟は、異母姉の中の君の元に身を寄せる。中の君は匂宮と結婚し、二条院に住んでいた。浮舟は中将の君と共に二条院に参上するのだが、ここで中将の君は邸の主である匂宮を覗き見るのである。

宮渡りたまふ。ゆかしくて物のはさまより見れば、いとさよらに、桜を折りたるさましたまひて、わが頼もし人に思ひて、恨めしけれど心には違はじと思ふ常陸守より、さま容貌も人のほどもこよなく見ゆる五位、四位ども、あひびざまつきささぶら

ひて、このことかのことと、あたりあたりのことども、家司どもなど申す。
〔東屋〕卷⑥四二頁^①

中将の君が匂宮を物の隙間から覗き見ると、「桜を折りたる」様子をしており、自分の夫である常陸守よりもはるかに優れた見た目の家来を従えている、と描かれている。

ここで中将の君は、匂宮を「桜を折りたるさま」であると形容している。この場面の季節は秋であるため、実際に匂宮が桜を折っているとは考えにくく、匂宮を形容した様子が「桜を折りたる」であることは明白である。本稿では、「東屋」巻における「桜を折りたるさま」という表現の分析を通し、『源氏物語』における桜の喩について考察を加えるものである。

一 「花を折る」「桜を折る」という表現

当該場面の匂宮には、最上級の美を表わす「きよら」という言葉が使われており、「桜を折りたる」と並列されていることから同類の意味を表わすだろう。『日本古典全書』（朝日新聞社）以後、各注釈書では「容姿や衣装の美しさの形容」であるとしており、また別に「花を折る」「花桜折る」などの言い方があるともしている。^②また、古注釈書は、「桜を折りたるさま」に注はつくもの、視点主

が中将の君であるという説明にとどまっておき、「桜を折りたるさま」の意味については言及されていない。

辞書類においては、「桜を折る」という項目はなく、基本的に「花を折る」で意味を確認した。まず、江戸時代の有職故実書である『貞丈雑記』巻之十五「言語の部」は、「花を折ると云う事」花を折ると云う詞は、人の衣装などの体、その外出立のありさまを、はなやかに、にぎにぎしくする事をいうなり。」とする。『岩波古語辞典』では、「花を折る」という項目について、「《花を枝ごと折ってかざす意から》容姿をはなやかにする。」、『日本国語大辞典』も、「花を折ってかざす意」衣装や身つくりいをはなやかにする。美しく着飾る。」とする。『角川古語大辞典』では「衣装などを美しく飾り立てる。」とあり、『貞丈雑記』を引用して、その根拠を述べていた。^③

『源氏物語の鑑賞と基礎知識』東屋^④において、中嶋朋恵氏は、当該場面の匂宮への形容に、諸注を基に「容姿の美しいことの形容である」としている。また、石黒吉次郎氏の「花を折る」考——折る意味のさまざま（特集 桜伝説）——（桜と日本人）^⑤においても当該場面が引用されているが、諸注釈の意味を引用し、「二条院での匂宮のはなやかな様子を述べたものである。」としているのみであった。当該場面を引用し、その意味を問う論には、一般的な

「花を折る」の意味であるとされてきた。しかし、池田亀鑑の「花を折る」補考では、この成語を題に持つ、『堤中納言物語』の「花を折る少将」の題意について考察がされている。池田氏は、「花を折る少将」という題については「美人を手に入れる少将」という解釈を提案している。

辞典類や『源氏物語』注釈書諸本に基づいて考えれば、「東屋」巻の「桜を折りたる」という語について句宮の容姿の美しさについて描かれていると解釈すべきであろう。しかし、単に「容姿や衣装の美しさ」であると解釈して良いのだろうか。池田氏のように「美女を手に入れる」等の意味がある可能性はないのか。また、喩であろうとも季節感を無視してまで「桜を折りたる」という表現を使っているのはどのような理由があるのだろうか。

二 折る

「桜を折る」という表現は、かざしを折って身に着けることから、容姿を華やかにする意であると解釈されていた。しかし、『堤中納言物語』「花を折る少将」における題意を、「美女を手に入れる」と解釈する論もある。また、「容姿を華やかにする」という意味からは、かざしにするべき花が桜であった理由が説明されていない。『源

氏物語』における「桜を折る」とは果たして容姿の華やかさを意味するものと解釈すべきなのだろうか。『源氏物語』における「桜」と「折る」の用例分析を基に考えていく。

『日本国語大辞典』によれば、「折る」という単語には次の意味がある。

(一) 一直線、または一平面のものを、ある点または線で二線分、または二平面のものにする。

(1) (棒状の物を) 二重になるように曲げる。また、手足や指などを関節部分から曲げることにいう。

(2) 曲げて二つの部分に切り離す。

(イ) 押し曲げて離し取る。手折る。

(ロ) 骨などに強い外力がかかって、くだけたり、二つの部分に離れたりして損傷する。

(3) (紙や布などについて) 折目をつける。折って形を作る。折りたたむ。

(4) 折句を作る。

(二) (二)の意を比喩的に用いる。

(1) 心を曲げる。気持をくじく。「鼻先をおる」

(2) (骨を折る)の形で) 尽力する。苦勞する。

(3) 動作や物事のつながりを分断して、続かないように

する。「筆を折る」

当該場面において、花などの植物を折るということは、「(一)における(イ)の「押し曲げて離し取る。手折る。」という意味が一番近いだろう。また、「桜を折る」は句宮の比喻表現として使われることを踏まえると、「(二)にある通り、一般的な「折る」という意味を比喩的に使われることがあることも注意しておきたい。

『源氏物語』では、「折る」という単語の用例は七十六例ある。このうち、花などの植物を折る場面が六十三例あり、折る対象の多くは植物である。植物以外では、手足や腰などの体の一部、扇の端や髪ざしなど、歌を書きつけて送る物が折る対象の例となっていた。今回は、「桜を折る」「花を折る」という成語についての論であるため、折る対象を植物のみに絞って分析をしていく。対象となる植物の種類は、多いものから梅(十例)桜(八例)菊(七例)藤(六例)朝顔(五例)撫子・常夏(四例)など、二十三種類であった。池田氏は、先述の論文において、「『折る』といふ語が、『掌中のものにする』といふ意味の比喩に使はれることがあるかといふと、それはたしかにある。」としており、『和漢朗詠集』や『紫式部日記』を引用して、「折る」に「わがものとする」「我が意に従わせる」という意味を付け加えている。また、同論文において、花は女性の喩になつていることも指摘されている。女性の喩に桜が設定された場合

の考察は後章で述べることにする。『源氏物語』においても「夕顔」巻の以下の場面を引用している。

霧のいと深き朝、いたくそそのかされたまひて、ねぶたげなる気色にうち嘆きつつ出でたまふを、中将のおもと、御格子一間上げて、見たてまつり送りたまへとおほしく、御几帳ひきやりたれば、御頭もたげて見出だしたまへり。前栽の色々乱れたるを、過ぎがてにやすらひたまへるさま、げにたぐひなし。廊の方へおはするに、中将の君、御供に参る。紫苑色のをりにあひたる、羅の裳あざやかにひき結ひたる腰つき、たをやかになまめきたり。見返りたまひて、隅の間の高欄にしばしひき据ゑたまへり。うちとけたらぬもてなし、髪の下り端めざましくもと見たまふ。

(源氏) 「咲く花にうつるてふ名はつつめども折らで過ぎうきけの朝顔

いかがすべき」とて、手をとらへたまへれば、いと馴れて、とく、

(中将) 朝霧の晴れ間も待たぬけしきにて花に心をとめぬとぞみる

と公事にぞ聞こえなす。 (「夕顔」巻①一四八頁)

六条御息所のもとを訪れた光源氏は明るる朝、六条御息所に仕え

る中将の君を見て、「咲く花に：」という歌を詠む。この歌は「咲く花のようなそなたに心を移したという評判が立つのは気がねなことだけれども、しかし、このまま手折らずに素通りはできかねる今朝の美しい朝顔よ」という解釈であり、確かに折るという言葉に手に入れるという意味の喩を重ねているようだ。

また、『源氏物語』の花を折る場面の代表例は「夕顔」巻の以下のくだりだろう。

切懸だつ物に、いと青やかなる葛の心地よげに這ひかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑みの眉ひらけたる。「をちかた人にもの申す」と独りごちたまふを、御隨身ついで、「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になん咲きはべりける」と申す。げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、この面かの面あやしくうちよろほひて、むねむねしからぬ軒のつまなどに這ひまつはれたるを、「口惜しの花の契りや、一房折りてまぬれ」とのたまへば、この押し上げたる門に入りて折る。

（『夕顔』巻①二二六頁）

光源氏は、乳母の見舞いのために五条にある乳母の家を訪れ、その隣の家に咲く白い花に興味を持つ。夕顔の花だと言う隨身に、光源氏は「口惜しの花の契り」だと思ひ、花を折ってくることを命じたのであった。この場面も後に夕顔の君との関係を持つことから、

夕顔の花を折るに手に入れるという喩が読み取れる。

他にも「藤裏葉」巻では、

御時よくさうどきて、「藤の裏葉の」とうち誦じたまへる、御気色を賜りて、頭中将、花の色濃くことに房長きを折りて、客人の御盆に加ふ。取りてもて悩むに、大臣、

紫にかごとはかけむ藤の花まつよりすぎてうれたけれども、幸相盃を持ちながら、気色ばかり押したてまつりたまへるさま、いとよしあり。

（『藤裏葉』巻③四三八頁）

元頭中将であった内大臣が夕霧に娘の雲居雁を許す際に、夕霧を藤の花の宴に招待した。そして、藤の「花の色濃くことに房長き」を折り、夕霧の盃に加える。藤は、藤原氏である内大臣家の比喩であり、花が女性の喩であれば藤原氏の娘である雲居雁のことである。それを客人である夕霧の盃に折って加えるというのは、夕霧に娘を許すということに他ならない。また、「宿木」巻でも、帝と薫が基の三番勝負を行い、帝はその勝利の褒美として「まづ、今日は、この花一枝ゆるす」と庭の菊の花を薫に折らせるのだった。この菊の花は、女二の宮の喩になっており、それを折ることを許したということは、薫に女二の宮を託すという帝の考えがある。「藤裏葉」「宿木」からは、父親が娘の結婚を許そうという時に花を折り、その許しとしていたことがわかる。池田氏の言う通り、「折る」という言

葉には「手に入れる」という意味があるようだ。

だとすれば、「東屋」巻の句宮に「桜を折りたるさま」という喩が使われていることにも同様の意味が込められていた可能性がある。即ち、「桜や花を手に入れる様子」という解釈、ひいては、「源氏物語」内の花を折る人物は多くが男性であった。「花を折る」という動作表現には「女性を手に入れる」という意味があるのではないだろうか。

三 花・桜

では、次に、折る対象である花の特徴を考えていく。花を女性に喩えることは前述したように多くの例がある。当該場面において、句宮は、「桜を折りたる」様子であると評言されていた。折る主体はもちろん句宮本人であるが、折られる「桜」は誰であったのだろうか。『源氏物語』で桜に喩えられる人物は、紫の上・女三の宮・中の君の三人である。

(一) 紫の上

「野分」巻では夕霧が紫の上を垣間見、紫の上のことを桜に喩えている。

御屏風も、風のいたく吹きければ、押したたみ寄せたるに、見通しあらはなる廂の御座にゐたまへる人、ものに紛るべくもあらず、気高きよらに、さとにほふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき**権桜**の咲き乱れたるを見る心地す。あぢきなく、見たてまつるわが顔にも移り来るやうに、愛敬はにほひ散りて、またなくめづらしき人の御さまなり。

〔野分〕巻④(二六五頁)

また、紫の上は光源氏からも桜に喩えられている。『若菜下』巻では六条院で女樂が催され、演奏者である女三宮、明石の女御、明石の君、そして紫の上が各々花に喩えられていた。紫の上はその中で桜の花の喩であった。

紫の上は、葡萄染にやあらむ、色濃き小袿、薄蘇芳の細長に御髪のためれるほど、こちたくゆるるかに、大ききなどよきほどに様体あらまほしく、あたりににはほひ満ちたる心地して、花といはば**桜**にたとへても、なほ物よりすぐれたるけはひことにものしたまふ。

〔若菜下〕巻④(一九二頁)

紫の上と桜といえば、「御法」巻では死期の近い紫の上が二条院にある桜を句宮に譲る場面も思い起こされる。桜と句宮の関係性を考えるに当たって、重要な場面と思われるため、引用する。

「大人になりたまひなば、ここに住みたまひてこの対の前なる

紅梅と桜とは、花のをりをりに心とどめてもて遊びたまへ。さるべからむをりは、仏にも奉りたまへ」と聞こえたまへば、うちうなづきて、御顔をまもりて、涙の落つべかめれば立ちておはしぬ。とりわきて生ほしたてたてまつりたまへれば、この宮と姫宮とをぞ、見さしきこえたまはんこと、口惜しくあはれに思されける。

〔御法〕卷④五〇三頁

『源氏物語の鑑賞と基礎知識』東屋^⑥では、「桜を折りたる様」という語の鑑賞について、「野分」巻と「若菜下」巻の二場面を挙げ、桜に喩えられる紫の上から「御法」巻のように二条院の桜を譲り受けた句宮が、「東屋」巻で「桜を折りたる様」と喩えられることに注目している。また、同時に『源氏物語』では、女君達が花にたとえられることは良く知られるが、(野分巻・若菜下巻)、男性がたとえられることはない。」とも指摘している。(確かに花を人に喩える場合、女性の喩となることが多いが、「東屋」巻の場面などでは男性である句宮が「桜」という言葉を使って喩えられており、一概に男性が喩えられることはないと言うのは早計かもしれない。)

(二) 女三の宮

次に女三の宮が桜に喩えられる場面である。「若菜上」巻において、六条院で女三の宮を垣間見た柏木は、女三の宮に対する慕情を募ら

せていく。その帰りに、柏木は夕霧と同車し、女三の宮を桜に喩えた和歌を詠むのである。

さるは、世におしなべたらぬ人の御おほえを。ありがたきわざなりや」といとはしがる。

(柏木) 「いかなれば花に木づたふ鶯の桜をわきてねぐらとはせぬ

春の鳥の、桜ひとつにとまらぬ心よ。あやしとおほゆることぞかし」と口ずさびに言へば、いで、あなあぢきなものあつかひや、さればよ、と思ふ。

(夕霧) 「みやま木にねぐらさだむるはこ鳥もいかでか花の色にあくべき

わりなきこと。ひたおもむきにのみやは」と答へて、わづらはしければ、ことに言はせずなりぬ。異事に言ひ紛らはして、おのおの別れぬ。

(若菜上) 卷④一四六―一四七頁

柏木はこれ以前にも「かたじけなくとも、さるものは思はせてまつらざらまし、げにたぐひなき御身にこそあたらざらめ(若菜上) 卷④一三六頁」と、光源氏の女三の宮への対応に、同情や義憤といった感情を抱いている。紫の上の勢いに圧されているという^⑦ 噂等も耳にしているため、「いかなれば」の和歌を詠む。「木づたふ鶯」は光源氏を指しており、様々な女性たち^⑧ 「花」を渡り歩く光

源氏Ⅱ「鶯」は、どうして「桜」を大事にしないのか、という意味になるが、この「桜」を、女三の宮に喩えているのである。これに対する夕霧の和歌では、「みやま木」を紫の上、「はこ鳥」を光源氏、「花」を女三の宮に喩えており、「深山木をねぐらに決めているはこ鳥も、どうして花の色に飽きることがあるだろう」と、柏木の考えを諷めている。

その後も柏木は、女三の宮を桜に喩えた和歌を詠む。

小侍従がり例の文やりたまふ。「一日、風にさそはれて御垣の原を分け入りてはべしに、いとどいかに見おとしたまひけむ。その夕より乱り心地かきくらし、あやなく今日はながめ暮らしはべる」など書きて、

よそに見て折らぬなげきはしげれどもなごり恋しき花の
夕かけ

とあれど、一日の心も知らねば、ただ世の常のながめにこそはと思ふ。
〔若菜上〕卷④一四八頁

柏木は女三の宮の乳母子に当たる小侍従に、六条院にて女三の宮を垣間見たことをそれとなく文にしたためた。この和歌にも「折る」という単語が使われている。和歌に出てくる「花」は女三の宮を表しており、その花を「折る」、つまり手に入れることができないうという嘆きを詠んでいると解釈ができる。この歌に対して小侍従

は、

常よりも御さしらへなければ、すさまじく、強ひて聞こゆべきことにもあらねば、ひき忍びて例の書く。「一日はつれなし顔をなむ。めざましう、とゆるしきこえざりしを、見ずもあらぬやいかに。あなかけかけし」と、はやりかに走り書きて、

「いまさらに色にな出でそ山桜およばぬ枝に心かけきと

かひなきことを」とあり。
〔若菜上〕卷④一四九頁

と返歌している。「山桜」はやはり女三の宮のことで、柏木が女三の宮には及ばないということを歌に詠んでいる。

しかし、これらの女三の宮が桜に喩えられる例は、あくまで柏木が女三の宮を持つ印象であったということは見落としてはいけない。女三の宮は紫の上ほどには「桜」に喩えられる女性ではなかった。その証拠に、六条院で開かれた女楽において、光源氏は紫の上を桜に喩えるのに対して、女三の宮のことを柳に喩えている。女三の宮を桜に喩えるのは、柏木からの視点によるものであり、光源氏や読者の視点においては、女三の宮は桜に喩えられるべき女性ではなかった。

(三) 中の君

八の宮の次女である中の君も、桜に喩えられる女性である。中の

君の諭に桜が使われる場面は、三例あると考えられ、主に句宮が八の宮の娘に贈った歌の中で見られる。「椎本」巻では、句宮は薫と共に宇治に花見に出かけ、以前から興味を持っていた八の宮の娘たち文を贈る。

かの宮は、まいて、かやすきほどならぬ御身をさへところせく思さるるを、かかるをりにだにと忍びかねたまひて、おもしろき花の枝を折らせたまひて、御供にさぶらふ上童のをかしきして奉りたまふ。

(句宮) 「山桜にはふあたりになづねきておなじかざしを折りてけるかな」

野をむつまじみとやありけん。御返りは、いかでかはなど、聞こえにくく思しわづらふ。「かかるをりのこそ、わざとがましくもてなし、ほどの経るも、なかなか憎きこといなむしはべりし」など、古人ども聞こゆれば、中の君にぞ書かせたてまつりたまふ。

(中の君) 「かざし折る花のたよりに山がつの垣根を過ぎぬ春の旅人」

野をわきてしも」と、いとをかしげにらうらうしく書きたまへり。

(「椎本」巻⑤一七四頁)

趣のある桜の枝につけて贈った文には、二人の姫君のどちらに对

するとも限定せずに和歌が詠まれる。「おなじかざし」とは、同じ皇族の血縁であることを意味している。「山桜にはふあたり」とは、もちろん花見に訪れた宇治のことを指すが、同じ血族である八の宮の姫君たちに宛てて書かれた「山桜」の歌は、姫君たちのことを指して詠まれたのだろう。これに対し、二人の娘のうち、中の君が句宮に対して返歌をする。この贈答以降、句宮からの文の返答は、中の君の役割となり、交流が続くことになる。

次に中の君が桜に喩えられるのは、花見の贈答から一年後のことである。この一年の間に、八の宮が亡くなり、大君と中の君の二人は喪に服していた。

花盛りのころ、宮、かざしを思し出でて、そのを見聞きたまひし君たちなども、「いとゆゑありし親王の御住まひを、またも見ずなりにしこと」など、おほかたのあはれを口々聞こゆるに、いとゆかしう思されけり。

(句宮) つてに見し宿の桜をこの春はかすみへだてず折りてかざさむ

と、心をやりてのたまへりけり。あるまじきことかなと見たまひながら、いとつれづれなるほどに、見どころある御文の、うはべばかりをもて消たじとて、

(中の君) いづくとかたづねて折らむ墨染にかすみこめ

たる宿の桜を

なほかくさし放ち、つれなき御気色のみ見ゆれば、まことに心憂しと思しわたる。
〔椎本〕卷⑤(二一四頁)

句宮は一年前の贈答を思い出し、和歌を贈る。この歌にも「桜を折る」というという表現がある。ここでの「折る」は、単に植物の花を折るというわけではなく、桜は女性、ここでは中の君を指し、「折る」は第三節で考察をした通り、手に入れるの意味を指していると解釈することができる。姉妹の喪中に対し、傍若無人な態度を取っており、中の君もこれに対して突き放した歌を返す。

中の君が桜に喩えられている例は、以上であるが、句宮が「桜を折りたるさま」と中将の君に評された「東屋」巻の例も、これに該当する可能性がある。中の君は桜に喩えられる女性であり、中将の君が句宮を中の君の夫というフィルターを介して垣間見た時、このような表現になる可能性は十分にある。「たり」を完了として解する場合、「桜を折りたるさま」の桜は、既に手に入れた女性を指す。この場合、既に妻となった中の君を折られた桜として捉えることができる。しかし、登場人物の様子を「たるさま」という語と共に書く時、「たり」という助動詞は、完了の意味よりも存続の意味で訳されることが多い。存続の意味で解した場合、句宮が様々な女性を手に入れ続けており、中の君以外の女性も桜に喩えられる人物の候

補として挙げるができるのだ。

では、存続で訳す場合の相手の女性とは一体誰なのだろうか。この後の物語と照らし合わせた場合、女性の候補として挙がるのは、やはり浮舟だろう。この時、句宮と浮舟はまだ出会っていないが、句宮のことを「桜を折りたるさま」と評したのは、浮舟の母親である中将の君であった。句宮を見た中将の君が、彼の立派さを見て自分の娘の夫にふさわしいと思えるほど素晴らしい男性であると理解し、このような評言になったのではないだろうか。浮舟は左近少将と婚約をしていたが、破談となってしまうため、中の君のいる二条院に預けられていた。中将の君はそのような背景から、娘にふさわしい男性を品定めしていたのではないだろうか。また、浮舟と薫、句宮を取り巻く話は、二人の男性が一人の女性を奪い合い、女性は自死を選ぶという話型で、『万葉集』に見られる、「桜児伝説」と似通う。また、「桜児伝説」との共通点は、話型のみではない。女に先立たれた男が詠んだ歌「春さらば かざしにせむと 我が思ひし桜の花は 散り行けるかも」は、春になったら桜の花をかざしにするために折ろうと思っていたが、女が死んでしまったという意味である。この初句「春さらば」は反実仮想であり、現実の季節は春ではない。春以外の季節に桜の喩を使う点でも、『源氏物語』の「東屋」巻との共通点が見出だせるのだ。

おわりに

本稿では『源氏物語』『東屋』巻における「桜を折りたるさま」という句宮への評言について、用例等を分析し、考察を行った。「桜」は、美しい女性、「折る」には手に入れるの意味があり、「桜を折りたるさま」には、美しい女性を手に入れるという句宮の行動や性質が象徴的に表現されている。また、桜に喩えられる女性として、中の君と浮舟の二人の可能性を考察した。今後は「桜を折る」という句宮の人物造型にも考察を加えていきたい。

【注】

(1) 『源氏物語』の引用は、『新編日本古典文学全集 源氏物語』

①～⑥ (小学館) に拠り、巻名・冊数・頁数を付す。以下、同じ。

(2) ① 池田亀鑑『日本古典全書 源氏物語六』(昭和二十一年

十二月)

容姿を美しくする意。「花を折る」ともいひ、特殊の成

語

② 山岸徳平『日本古典文学大系18 源氏物語 五』(昭和

三八年四月)

桜の花を折ったような、つやつやと匂う、美しい容姿をなされて。「わたり給ふ」と、倒置になっている。

③ 玉上琢彌『源氏物語評釈 第十一巻』(昭和四三年三月)

前に来たときは、中の宮に御挨拶申し上げ、宇治の八の宮のお墓へお参りするお許しをねがい(宿木の巻)、早々に退出したのであろう。「ことにゆるいたまはざりしあたりを」(四〇三行)とあるところから見ても、察せられることである。今度は、推参ながら、娘を当分お預かりねがうのである。「二三日ばかり母君もゐたり、こたみは、心のどかに、この御ありさまを見る」(四一五行)。「この御ありさま」には、御主人、句宮のことともはいる。その、「宮、わたりたまふ」ことがあった。のぞく。その美しさを「桜折りたるさま」と、北の方は形容する。

④ 阿部秋生他『日本古典文学全集17 源氏物語六』(昭和五一年二月)

容姿の美、衣装の華麗をいう成語。「花を折る」「花を折る」などの言い方もある。

⑤ 石田譲二・清水好子『新潮日本古典集成 源氏物語七』(昭和五八年十一月)

容姿の美しいことの形容。「花を折る」という修辭もある。

〔栄花物語〕根合)

⑥ 柳井滋他『新日本古典文学大系23 源氏物語 五』(平成九年三月)

容姿の美しさの形容。「花を折る」「花を折る」ともいう。

⑦ 阿部秋生他『新編日本古典文学全集25 源氏物語⑥』(平成十年四月)

容姿の美や衣装の華麗さなどをいう成語。「花を折る」「花を折る」などの言い方もある。

(3) 「花を折ると云詞は、人の衣装などの体其外出立のありさまを、はなやかににぎにぎ敷する事をいふ也」

(4) 鈴木一雄監修『源氏物語の鑑賞と基礎知識⑥ 東屋』(平成一年六月)

(5) 石黒吉次郎「花を折る」考——折る意味のさまざま——特集 桜伝説——(桜と日本人)「(スサノオ)平成一七年三月)

(6) 月はさし出でぬれど、花の色さだかにも見えぬほどなるを、もてあそぶに心を寄せて、大御酒まあり、御遊びなどしたまふ。大臣、ほどなく空酔ひをしたまひて、乱りがはしく強ひ酔はしたまふを、さる心していたうすまひ惱めり。「君は、末の世にはあまるまで天の下の有職にもしたたまふめるを、

齡経りぬる人思ひ棄てたまふなんつらかりける。文籍にも家礼といふことあるべくや。なにがしの教へもよく思し知るらむと思ひたまふるを、いたう心悩ましたまふと恨みきこゆべくなん」などのたまひて、酔泣きにや、をかしきほどに気色

ばみたまふ。「いかでか。昔を思うたまへ出づる御かはりどもには、身を棄つるさまにもとこそ思ひたまへ知りはべるを、

いかに御覧じなすことにかはべらん。もとより愚かなる心の怠りにこそ」とかしこまりきこえたまふ。御時よくさうどき

て、「藤の裏葉の」とうち誦じたまへる、御気色を賜りて、

頭中将、花の色濃くことに房長きを折りて、客人の御盆に加ふ。取りてもて悩むに、大臣、

紫にかごとはかけむ藤の花まつよりすぎてうれたけれど

も
宰相盆を持ちながら、気色ばかり拝したてまつりたまへるさま、いとよしあり。

いくかへり露けき春をすぐしきて花のひもとくをりにあ

ふらん
頭中将に賜へば、

たをやめの袖にまがへる藤の花見る人からや色もまさらむ

次々順流るめれど、酔ひの紛れにはかばかしからで、これよりまさらず。
〔藤裏葉〕卷③四三八頁

(7)

さて打たせたまふに、三番に数一つ負けさせたまひぬ。「ねたきわがかな」とて、「まづ、今日は、この花一枝ゆるす」とのたまはすれば、御答へ聞こえさせで、下りておもしろき枝を折^りて参りたまへり。

世のつねの垣根にはふ花ならば心のままに折^りて見ましを

と奏したまへる、用意あさからう見ゆ。

霜にあへず枯れにし園の菊なれどのこりの色はあせずも

あるかな

とのたまはず。

〔宿木〕卷⑤二七九頁

(8)

〔新編日本古典文学全集 源氏物語④〕一四六頁頭注より。「柏木は世評を聞いているので女三の宮に同情、というよりは義憤をさえ抱いている。

(9)

そのをりより語らひつきにける女房のたよりに、御ありさまなども聞き伝ふるを慰めに思ふぞ、はかなかりける。「対の上の御けはひには、なほ圧されたまひてなむ」と、世人もまねび伝ふるを聞きては、〔若菜上〕卷④二三五―二三六頁

(10)

月、心もとなきころなれば、灯籠ごなたかなたにかけて、灯

よきほどにともさせたまへり。宮の御方をのぞきたまへれば、人よりけに小さくうつくしげにて、ただ御衣のみある心地す。にほひやかなる方は後れて、ただいとあてやかにをかしく、二月の中の十日ばかりの青柳の、わづかにしだりはじめたらむ心地して、鶯の羽風にも乱れぬべくあえかに見えたまふ。桜の細長に、御髪は左右よりこぼれかかりて、柳の糸のさましたり。

〔若菜下〕卷④一九一頁